

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ペルーの鳥居龍蔵を追って： 2人の考古学者との出会い

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4540

紀行

ペルーの鳥居龍蔵を追って

——2人の考古学者との出会い



鳥居龍蔵の南米調査行程。



関雄二

鳥居がカルロス・ラルコに案内されて訪問した「跣足の修道院」。



モヘケ遺跡の前に立つフーリオ・C・テーヨと鳥居龍蔵。

明治、大正、昭和を生き抜いた人類学者鳥居龍蔵は、広くアジアをフィールドとし、数多くの著作を残した。その鳥居が、太平洋戦争が始まる直前の1937年に、南米のブラジルとペルーを訪れたことを知る研究者は意外に少ない。ここでは、南米、とくにペルーでの鳥居の足跡を10年以上にわたって追ってきた私の調査を紹介したい。

1枚の写真

旅の動機は、1枚の写真との出会いにある。かなり前だが、1989年、ペルーの首都リマ市に国立国民博物館が開館することになり、準備室に勤務していた友人の考古学者を尋ねたときのことである。展示室の片隅に置かれた写真パネルが、ふと目にとまった。そのパネルの古い写真にはペルー中央海岸北部にあるモヘケとよばれる神殿を飾るレリーフを背景に立つふたりの人物が写っていた。ひとりは1937年にこの遺跡を調査したペルー考古学の父、フーリオ・C・テーヨであったが、友人は隣の東洋人らしい紳士は誰だかわからないという。近づいて見ると、鳥居龍蔵であった。

鳥居が南米を訪れたことは知ってはいたが、こんな写真があるとは。さっそく写真原板を収蔵する国立人類学考古学博物館（現国立人類学考古学歴史学博物館）を訪ねて写真を手し、鳥居のペルーでの足跡を調べる私の旅が始まった。



国立サン・マルコス大学カソーナ文化センター学位授与サロン。鳥居の講演会場と思われるが、2008年、ここで日本考古学調査団50周年記念シンポが開催された。

ブラジルからペルーへ

鳥居龍蔵全集に収められている南米行にかかわる講演記録などによれば、南米行は外務省からの派遣であり、今日の文化外交的な性格をもっていたようだ。まずは、鳥居の行程を確認するために、1997年に徳島県鳴門市の鳥居記念館に鳥居龍次郎を訪ねた。龍蔵に同行した次男龍次郎の記憶は60年後とは思えぬほど鮮やかであった。記念館には、南米で収集した土器も展示してある（2010年3月で閉館）。

龍次郎によれば、ブラジルにおいて現地研究者との交流、遺跡訪問、さらには発掘まで

こなした鳥居一行は、大河アマゾンを経由して2カ月も遡航し、ペルーに入ったという。イキートス市に到着した後、出迎えた日系人とともに、首都リマまで空路移動する。

リマ到着後の動きについては、新聞記事が役立った。ペルーでもっとも権威ある新聞『エル・コメルシオ』紙のアーカイブ室で、鳥居の到着を肖像写真入りで報じる1937年9月1日付の新聞を見つけたときの感激は忘れられない。日付から判断すると、8月31日にリマ入りしていたことになる。そこには、東京大学、上智大学の職歴から、学位論文、叙勲にいたるまで、かなり詳しい情報が紹介されている。

さらに9月5日の記事には、前日、鳥居らが南米最古の歴史を誇る国立サン・マルコス大学を訪問し、インカ研究の第一人者であり、当時、文学部長を務めていたオラシオ・ウルテアガと長時間にわたり対談したことが報じられている。

鳥居が訪れた文学部棟は旧市街地にあり、現在校舎としては使用されていないが、大学の文化センターとして機能しつづけている。昨年、私は、ここで日本考古学調査50周年記念シンポジウムをサン・マルコス大学と共催した。70年以上前、鳥居が立った同じ場所で発表をするのかと思ったとき、言いしれぬ感動さえ覚えた。

さて鳥居らは、その後、インカ帝国の都クスコやボリビアのティワナク遺跡などを訪問している。移動経費については、ほとんどリ



鳥居の来秘を告げる新聞記事。左上に鳥居の写真が見える（*El Comercio*紙 1937年9月1日）。



鳥居が講演した国立サン・マルコス大学旧文学部（現文化センター）。

マの中央日本人会から援助を受けたと龍次郎は語っていた。とくにクスコ地方におけるインカ期の見事な石造技術に感動したようだ。

いったん首都リマに戻った鳥居は、海岸の遺跡踏査を始める。遺跡自体は、先インカ期のものが多く、インカに収斂される諸文化の発展段階を把握しようという意図がうかがわれる。とくにリマから北に600キロほど離れたペルー第2の都市トルヒーヨでは、日本名誉領事の歓待を受け、膨大な考古遺物のコレクションも目にしたと龍次郎は語っている。

鳥居龍造の足跡

2001年、私は、チクリンという北海海岸の村を訪問した。この村は1969年の左派軍事政権による農地改革がおこなわれるまで繁栄したサトウキビ農場の本拠地として築かれたもので、農場主は、ペルー考古学の草分けラファエル・ラルコ・オイレの血筋にあたる。彼は、収集家であると同時に、現在でも通用するような編年を発掘などで樹立した学者であり、

龍次郎の記憶にも登場するコレクションを披露した人物だろうと以前から推測していた。

村は思いのほか寂れていたが、当時の面影を残す劇場、ラファエルが建てた考古学博物館などの建物は残っていた。1968年のクーデターによって成立した軍事政権は、大農場制を解体し、社会主義的政策をおこなうが失敗し、地方の農村はすっか

り荒廃してしまうのである。村を歩き、農場跡を見ようと思って道を尋ねると、博物館があるという。驚きだった。教えられた住所に向かい、大きな鉄扉をたたくと、中から中年の男性が顔を出した。彼はラルコ家の血筋を引く人物で、邸宅を改造したチクリン博物館の館長と名乗った。

考古遺物の大半は、リマに建設されたラルコ・エレラ博物館に移管され、たいしたものはないが、大農場時代の生活を写した写真や生活用具が展示してある。館長に鳥居がラルコ家の人びとに会ったはずだと話すと、書類を探しておく約束してくれた。後日、日本に届いた書類には、期待に違わず、鳥居の足跡にかかわる情報が溢れていた。

それによれば、鳥居を接待したのは考古学者のラファエルではなく、彼の叔父にあたり、当時、日本名誉領事に就いていたカルロス・ラルコ・エレラであった。そのことを記したトルヒーヨ市の日系人協会よりの紹介状がある。名誉領事が、鳥居のために書籍を集め、首都リマでも案内を買ってでるほど親切であ

ったという龍次郎の記憶とも一致する。

おそらく、このカルロスが鳥居を甥のラファエルに会わせたのであろう。会場でラファエルのもつ考古学的知識に感服した鳥居は、彼に学位論文としてまとめることを勧めたと龍次郎は語っている。ラファエルの著作を調べてみると、鳥居に出会った翌年から、考古学関係の著作を本格的に出版しているので、確かに会見が刺激になった可能性はある。

なお鳥居が訪問したその年、ラルコ家の考古学コレクションの一部は、カルロスの計らいで、名古屋市で開催された産業博覧会に展示され、その後東京帝国大学に寄贈されたことを記す珍しい文書も見つかった。もちろんペルー文化の普及が目的であった。これについては、2002年頃、東京大学文学部考古学教室を訪ね、寄贈品がいまだに保管され、収蔵品カタログにカルロスの名が記載されていることを確認した。

考古学者の矜持

さて北海海岸を訪問した後、鳥居一行は、中央海岸北部の遺跡を訪問する。そこで出会ったのが、冒頭でとりあげた考古学者テーヨであった。テーヨは当時サン・マルコス大学の教授でもあり、考古学の分野においては右に出るものがないほどの実力者であった。

初対面のテーヨは鳥居によよそしい態度を示したと龍次郎は記憶している。テーヨは元来気難しい、用心深い性格の学者として有名であり、しかも突然押しかけた素性もわからぬ異邦人に心など開くわけはなかった。説明もフィールド・ノートを開いて見せるばかりで、発見した遺物や遺構を見せたがらず、気まずい雰囲気であったと龍次郎は懐古する。

ところがこの状況が一変する。テーヨの背



チクリン村にあるラルコ・エレラ博物館の建物跡。建物はラファエルが父の名を冠して建てた。



チクリン博物館内部。



鳥居が訪れた北海岸チャン・チャン遺跡。現在は世界文化遺産に登録されている。



テーヨに案内されて鳥居が訪れたペルーの中央海岸北部のセロ・セチン遺跡。神殿外壁が石彫で覆われている。

後で、外国人学生が作業をしていた。これを見た鳥居は、旧知のイギリスの人類学者ラドクリフ=ブラウンの名をあげる。米国で人類学を研鑽した経験をもつテーヨにとっては知らぬはずのない碩学が、鳥居の友人であることを知って態度を豹変させたようだ。それまで隠していたレリーフも見せてくれたほどである。これには鳥居に随行していた公使館の書記官も驚き、鳥居を見直したという。

とはいえテーヨもしたたかであった。鳥居が遺構の前に写真を撮ろうとすると、誘いもしないのに必ずテーヨが隣に立ったと龍次郎は語っていた。おそらく、発見を他人の手柄にされないための予防策であったのだろう。件の写真は、記念写真ではなかったのだ。

実際に、テーヨは報道に大変な注意を払い、調査後は論文よりも新聞紙上で先に調査概要を発表していた。テーヨの死後、弟子がまとめた著作に鳥居の名が1カ所出てくる。弟子による付録の文章であるが、モヘケ神殿の調査中に、ここを訪れた人間がたった2人であ

ること、そしてレリーフが発見されたのが8月下旬で、鳥居の訪問がその直後であったことがわかる。いかにテーヨが用心していたか想像がつく。なお現在のモヘケ遺跡にはレリーフの残骸すら残っておらず、その意味でテーヨと鳥居の写真は貴重な資料といえよう。

こうして遺跡訪問を終えた鳥居一行はリマに戻り、講演をこなし、リマ市内の教会や邸宅を訪問した。このなかには龍次郎の記憶が曖昧であった、豊臣秀吉の弾圧の前に殉教した長崎の26聖人の絵を所蔵する「跣足の修道院」も含まれていた。龍次郎が唯一覚えていた絵を手がかりに場所を私が同定し、撮影した写真を龍次郎に送ったら、たいそう喜んでくれた。こうして鳥居の南米行は無事終了し、1938年1月26日に帰国する。

鳥居とペルーにおける二人の偉大な考古学者との出会いは、偶然とは決していえない。アジア大陸を股にかけ、調査をおこなってきた鳥居にとっては、インフラの整備されてい

なかったアンデスの地を踏査することなど苦でもなかったろう。しかも欧米の研究書に書かれたことを鵜呑みにせず、自らの目で遺跡を確かめるという頑固なまでの姿勢が貫かれている。この精神と態度が現地の一線級の考古学者との出会いを誘ったのである。

また専門地域ではなかったのにもかかわらず、鳥居が南米に強

い思い入れをもっていたのは、ダーウィンなど偉大な博物学者が足を踏み入れた場所であったからではないだろうか。鳥居が若いころこうした博物学者の著書を耽読した点はよく指摘されているし、いずれの欧米の学者も若くして中南米を訪れ、学問的業績をあげた点に鳥居はこだわっていたからである。実際に、南米が若い研究者のフィールドという点を講演でも強調している。

鳥居の帰国記念講演のちょうど20年後、東京大学アンデス地帯学術調査団が発足し、日本におけるアンデス研究が本格的に開始される。そして昨年で50周年を迎えた。その意味で、鳥居の蒔いた種は確実に育ってきたといえるのかもしれない。



鳥居一行が訪れた「跣足の修道院」。



せき ゆうじ

研究戦略センター教授

1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査をおこない、アンデス文明初期（前3000年～紀元前後）における社会の成立と変容の解明に取り組む。また文化遺産の保全をめぐる地域社会と国家、ユネスコとの関係を問いなおす研究や文化遺産を核とする村落開発プロジェクトの実践に携わる。